

日本語教科書における後項動詞「だす」の出現実態

— フレーム意味論に基づいて —

靳夢瑩（九州大学大学院）

要 旨

本研究はフレーム意味論を用い、日本で広く使用されている日本語教科書から後項動詞「だす」の多義性について考察を行い、各レベルにおいて「だす」の用法及び前項動詞との結合傾向を明らかにすることを試みた。その結果、「だす」の用法によってLocative_relationフレーム、CreatingフレームとProcess_startフレームが喚起されることが明らかになった。また、ものの移動を表すLocative_relationフレームは中級において出現率が50%に達すること、知覚できる新たな状態が起こったことを表すCreatingフレームはどのレベルでも出現率が高いことが分かった。さらに、「だす」がLocative_relationフレームとCreatingフレームを喚起する場合、共起する前項動詞によって喚起されたフレームに特定の傾向が見られる一方、Process_startフレームと共起する前項動詞には特定の傾向は見られないことが分かった。

【キーワード】 日本語複合動詞 フレーム意味論 教科書 レベル別 出現傾向

1. はじめに

「泣き叫ぶ」「飛び出す」のような複合動詞は日本語の学習者にとって習得しにくい項目の1つである。教科書に与えられた動詞のほとんどは単純動詞であり、それらの動詞を組み合わせた複合動詞については、学習の機会があまりない（森田 1978）。また、複合動詞についての導入は一定の基準が存在せず、教科書での扱いも出版社によって異なるため、多くの教師は自身の経験に頼って教授している（張 2009）。

学習者の学習レベルに応じて複合動詞を導入することは、複合動詞の習得において重要である。複合動詞の学習ニーズを見直し、複合動詞習得の立場から基礎研究を強化することで、どのレベルのどの用法の習得が困難であるかを系統的に把握することができる。そのために、現時点で使用されている教科書を調査し、複合動詞がどのように扱われているかを明らかにすることは現実的な課題である。

日本語の教科書は、日本語教育の経験豊かな教師が学習者の学力及び習得すべき知識を判断しながら編集し、出版されるものであるが、各学習段階でどのような知識を学習者が習得すべきかを明らかにするには、異なるレベルの教科書を使用した分析が有効である。そこで、複合動詞において、教科書の各レベルにおける前項動詞と後項

動詞の用法の結合傾向を把握し、複合動詞の習得に明確な指標を提示することが期待できる分析手法として、フレーム意味論が適切であると考えられる。フレーム意味論は、語の背景知識（フレーム）をもとに語を理解する経験的意味論であり、前項動詞と後項動詞が喚起するフレームをそれぞれグルーピングし、その関係を異なるレベルに応じて明らかにすることができるためである。

今回研究対象として取り上げる後項動詞「だす」は生産性が高い。『複合動詞レキシコン』には、語彙的複合動詞が2,700件登録されているが、「だす」を後項動詞とする複合動詞は132件あり、「込む」(255件)と「上げる」(133件)に続き、3番目に用法の件数が多い(ローレンス 2020)。また、「だす」は教科書での出現頻度も高い。4章で詳しく述べているが、今回の研究のため、筆者が日本語教科書において複合動詞の出現傾向を確認したところ、後項動詞「だす」は各レベルの教科書に出現し、総出現頻度が最も高く、182件が確認された。

そこで、本研究では多くの日本語学習者が使用している教科書を対象に、「動詞連用形+だす」という形の複合動詞を中心に、フレーム意味論に基づく語彙情報データベースであるフレームネットを用い、レベル別の出現実態を明らかにすることを試みる。

2. 先行研究

日本語複合動詞は考察対象によって、定義が異なる。「旅立つ」、「元気づける」のような名詞・形容詞に続くもの(国立国語研究所 1985、p.28)及び「買って帰る」のような「て」形に続くものは広義的複合動詞であり、「飛び出す」、「泣き叫ぶ」のような動詞の連用形に続くものも複合動詞(姫野 1977)である。本研究では、「飛びだす」のような2つの単純動詞によって作り出された「動詞連用形+動詞」という構造を持つ語を複合動詞とする。そして、「飛ぶ」のように前に位置する動詞を「前項動詞(V1)」、「だす」のように後ろに位置する動詞を「後項動詞(V2)」と呼ぶ。この構造を持つ複合動詞は結合形態が豊富で生産性が高いため、日本語学習者には「*やりだす」、「*耐えだす」のような誤用がよく見られ、学習者にとっては習得しにくい項目だと言える(金 2014)。また、「だす」は後項動詞として機能する際に複数の意味を持つため、用法が紛らわしいと言われている(王 2009、白 2007)。

2.1 後項動詞「だす」の意味分類

従来、複合動詞は格支配と意味関係を中心に、複数の分類が行われてきた。代表的な研究として、「だす」の意味分類に関する研究を行っている姫野(1977)、田辺(1983)が挙げられる。

姫野(1977)は、後項動詞である「だす」は、意味的役割を中心に、〈移動〉、〈顕在化〉、〈開始〉の3つの役割を担っていると主張している。〈移動〉の意味的役割を

担う「だす」は共起する前項動詞の意味特徴によって〈外部、前面、表面への移動〉、〈表だった場への出現〉に分けられ、〈顕在化〉の意味的役割を担う「だす」は共起する前項動詞の意味特徴は〈顕現〉、〈創出〉、〈発見〉等に細かく分けられる。〈開始〉のアスペクトを示す「だす」は動作・作用の開始を表し、結合する前項動詞は時間の経過を有する「継続動詞」および動作・作用が繰り返される「瞬間動詞」となるとした。田辺（1983）は姫野（1977）に基づき分析を行っている。田辺は姫野の〈開始〉を「一般的な動作動詞」「漸次性を持つ動詞」の2つに分け、また、アスペクトによって別の分類をたて、「瞬間動詞と結び付いて複数主体によって同一動作の連続して現れる現象の開始」と「継続動詞と結び付いて複数主体によって同一動作の連続して現れる現象の開始」に分けている（田辺 p.43）。

これらの研究が後項動詞「だす」の用法を中心に分類したことで、母語話者の語感に頼らず、日本語学習者でも客観的に後項動詞「だす」の意味を解釈できるようになった。しかし、日本語教育の場において、「だす」の各用法をどのレベルの学習者に習得させるべきか、「だす」の用法によって前項動詞との結合が制限されるか等の課題が残されている。この課題は、フレーム意味論を用いることで、「だす」の用法だけでなく、結合する前項動詞とのレベル上の差を分析することが可能になると考える。また、教科書のレベルと対応させることで、複合動詞のより効果的な習得順序などを詳細に分析できるであろう。さらに、この分析手法は他の複合動詞の研究にも応用可能であり、フレーム意味論の枠組みで他の多義性を持つ後項動詞の傾向を考察し、教科書の各段階で頻繁に出現する複合動詞を体系的に提案することが期待できる。

2.2 フレーム意味論とフレームネット

フレームとは、経験に基づき蓄積してきた様々な事象や状況に関する知識をスキーマ化したものである（小原・長谷川 2022、p.21）。このフレームの概念を用い、言語表現と背景知識との関係を重視する経験的意味論の枠組みにフレーム意味論がある。例えば「売る（sell）」という語を理解するには、「売り手（Seller）」が「買い手（Buyer）」に「品物（Goods）」を渡し引き換えに「代金（Money）」を受けるという商取引についての背景知識が必須になる。このような背景知識はフレームと呼ばれている。語の表面的な意味に留まらず、背景知識と語の意味を連結させ、フレームで記述することで、詳細な意味レベルでグルーピングすることが可能となり、意味理解がより具体化される。

フレームネットは1997年からカリフォルニア州バークレーのコンピューターサイエンス研究所（ICSI）により運営され、「フレーム意味論・意味フレームに基づく（オンライン）電子化語彙体系辞書」であり、語句が「フレーム」の観点から記述されることが最大の特徴であると言われている（藤井・内田 2023）。例えば、「売る（sell）」

という動詞はCommerce sellフレームを喚起すると同時に、買い手 (Buyer)、品物 (Goods)、売り手 (Seller) などのようなフレーム要素も喚起する。

多義の後項動詞と前項動詞の意味をフレームネットで記述し、意味の一致により複合動詞の多義性を判断することができる。陳・松本 (2018) はフレームネットを用い、複合動詞における多義語の意味がどのように決定されているのかを考察した。この研究では、語彙的複合動詞を構成する単純動詞である「取る」が、どの意味で複合動詞として成立するのかを検討している。その結果、「取る」の前項動詞と意味的一致が見られるかによって成立するか否かが決定されるということが明らかになっている。例えば、「取る」は「対象を取得する」、「対象を除去する」、「対象を取得するあるいは対象を除去する」などの3つの意味に分けることができる。「盗み取る」について、「対象を取得する」という意味を表す「取る」は前項動詞である「盗む」の目的である「対象を自分の所有物にするため」と意味的一致があるため成立している。また、「対象を除去する」を表す「取る」は「盗む」との間に意味的一致が見られないため、複合動詞として成立しないと述べている。

陳・松本は、フレーム意味論による多義の後項動詞の分析の可能性を示し、前項動詞と多義の後項動詞の結合条件の判断、複合動詞の意味記述などの問題を解明した。しかし、管見の限り、フレーム意味論の観点から複合動詞を具体的に教育の現場と繋げる方法、及び教科書における複合動詞の出現傾向を検討した先行研究は少ない。

そこで、本研究ではフレームネットを用い、後項動詞「だす」の各用法と前項動詞の結合傾向をフレームで記述し、後項動詞「だす」の結合パターンを精緻にグルーピングすることで、量的かつ理論的に複合動詞の結合傾向を「具体化」を試みる。次に、教科書のレベルを指標として「だす」の用法によって喚起するフレームを、統計手法を用いて分析することで、各用法がどのように扱われているのかなど、主観に頼らず視覚的に確認できるようにする。

3. 研究課題

本研究はフレームネットを用いて教科書に出現した「だす」のレベル別の出現傾向を考察することを目的とする。具体的な課題は以下の2つである。

課題1：日本語教科書における多義性を持つ後項動詞である「だす」についてレベル別に出現傾向を分析する。

課題2：「だす」が喚起する各フレームと共起する前項動詞が喚起するフレームについてレベル別に出現傾向を分析する。

4. 研究方法と意味分類

4.1 研究データと研究方法

日本で汎用されている日本語教科書¹⁾を収集し、『レベル別教科書コーパス（以下：教科書コーパス）』を作成した。また、教科書に与えられたレベル標識を中心に、初級、中級、上級の3つのレベルに分け、計423,990語が集計された。具体的な語数情報は表1に示す。

表1 レベル別教科書コーパスの語数情報（単位：語）

	初級	中級	上級	合計
延べ語数	132,324	118,966	172,700	423,990
動詞の延べ語数	11,526	15,338	22,232	49,096

次に、spaCy (v3.5.0) の標準モデルのja_core_news_smを用い、教科書コーパスから「token.pos_=="VERB" and doc[token.i+1].pos_=="VERB"」を条件文として複合動詞が含まれる文とレベル情報を抽出し、複合動詞リストを作成した。また、「文番号、前文脈、動詞、後文脈」等の項目が含まれる動詞リストをspaCyで作成し、一語と認められた複合動詞を目視で選び出し、複合動詞リストに加えた。次に、出現頻度が最も高い後項動詞「だす」を対象とし、喚起するフレームを判断した結果、182例から4例を除外し、178例を研究対象とした。さらに、「だす」の用法についてレベル別の出現傾向を明らかにした後、用法別に前項動詞が喚起されたフレームを中心に、RStudioのcaパッケージを用い、対応分析でレベル別の出現傾向を明らかにした。

動詞が喚起されるフレームの判断については、文脈による動詞の意味を英語に訳し²⁾、対応するフレームを探るという流れで行った。また、「はみだす」と「居眠りだす」のように、前項動詞（例：「はみ」）が独立の意味を持たない複合動詞や、3つの動詞（例：「居る」「眠る」「だす」）から構成する複合動詞は研究対象から除外した。

4.2 「だす」の分類基準

フレームネットのフレームはフレーム要素によって定義されている（藤井・内田2023）。語彙を喚起するフレームを分類する際に、意味的に必須な要素としてコアフレーム要素で判断することが有効である。例えば、「位置関係」を表すLocative_relationフレームの定義は以下となる。

A <Figure> is located relative to a <Ground> location.

このフレームは「位置関係」を表すために、意識あるいは事象主体 <Figure>、位置 <Ground> と主体が見出される可能性のある領域 <Profiled_region> が必要となる。また、他のフレーム要素として、主体の見やすさを示す <Accessibility>、主体と位置

の位置関係を表す〈Deixis〉、位置から主体への方向性を示す〈Direction〉、主体と位置の関係性を修飾する〈Directness〉、主体と位置間の距離を示す〈Distance〉などが挙げられる。本研究は、フレームネットで既に構築されたフレームの定義を引用し、後項動詞「だす」が現れる文において各フレーム要素に合致する語を確認しながら、後項動詞「だす」が喚起するフレームを識別する。なお、コアフレーム要素で判断しにくい場合は、周辺のフレーム要素で判断する場合もある。

4.3 「だす」の語義とフレーム

本研究は、姫野（1999）と呉（1983）を参考にしながら、後項動詞「だす」の意味分類を以下のように行った。

意味1 物体・物質の外部、前面、表面への移動を表す。

意味1は「だす」の基本的意味であり、物体・物質が移動させられる意味を表す（姫野 1999）。移動の方向は主に「内部から外部へ・後から前へ・裏から表面へ」などが含まれる。

例1 父は、私たちが庭へ連れ出し花火をした。 (31 中級)

例1は、「私たち」は〈Figure〉、「庭」は〈Ground〉に対応すると見なせるため、「だす」の〈移動〉の意味は、Locative_relation フレームで説明できると考える。

意味2 顕在化を表す。

意味2は、隠されていた対象が外部や表面に現れることによって人の目に触れることを表す（姫野 1999）。あるいは、元々なかったものが新しく作り出されることを表す。

例2 また、優れた性質のガラスは、製法を変えることによっても作り出された。 (24 中級)

Creating フレームの定義は“A Cause leads to the formation of a Created_entity.”である³⁾。例2は、「優れた性質のガラス」はCreating フレームのコアフレーム要素として作られた実体〈Created_entity〉、「製法を変えること」は原因〈Cause〉に対応すると見なせるため、「だす」の〈顕在化〉の意味は、Creating フレームで説明できると考える。

意味3 事態の開始を表す。

意味3において「だす」は新たな行動を行うというアスペクトの意味を表し、事態の〈開始〉を表す（姫野 1999）。

例3 すると、男はまんじゅうを見て、震え出した。 (22 中級)

Process_start フレームの定義は“An Event begins at a certain Time and Place. An Explanation may also be indicated. NB: Refer to Event frame.”である⁴⁾。例3は、「震える」

はProcess_startフレームのコアフレーム要素〈Event〉に対応し、震えることが開始することを表すため、「だす」の〈開始〉の意味はProcess_startフレームで説明できると考える。

5. 教科書における「だす」の出現傾向

本節では、教科書に現れた後項動詞である「だす」の用法によって喚起されるフレームを集計した。表2は「だす」の用法によって喚起するフレームのレベル別頻度表である。全体的にみると、初級、中級、上級において後項動詞「だす」の出現回数は各々9、51、118で、レベルが上がるにつれて出現頻度が顕著に高くなることが分かった。

表2に基づき、各レベルにおいて「だす」が喚起するフレームが占める比率を図1で示す。

表2 「だす」が喚起するフレームのレベル別集計表（単位：語）

フレーム	初級	中級	上級
Locative_relation	2	16	26
Creating	5	28	88
Process_start	2	7	4
合計	9	51	118

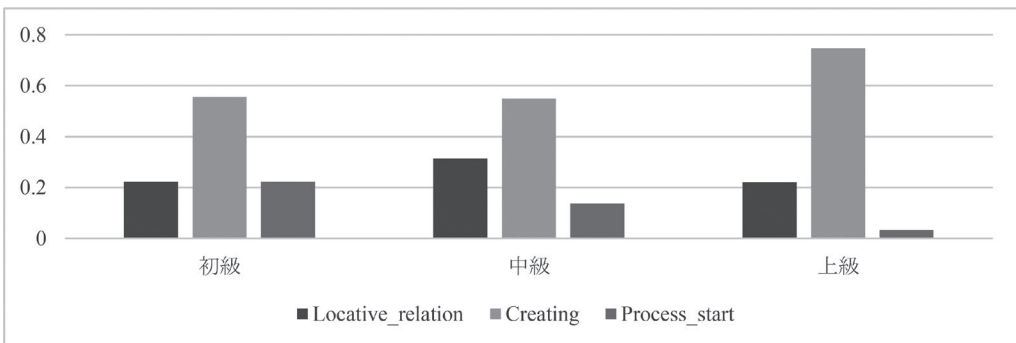


図1 「だす」が喚起するフレームのレベル別出現率

まず、「だす」が喚起するLocative_relationフレームの出現率は中級で最も高かった。初級と上級においてLocative_relationフレームの出現率は約22%で、中級では30%以上に増えた。表2に合わせて見ると、レベルが上がるにつれてフレームの出現頻度が高くなるが、上級ではCreatingフレームが占める割合が高いため、〈移動〉用法が占める割合が少なくなる傾向が見られる。よって、中級になると「だす」の〈移動〉用法の導入が増える傾向が見られる一方、上級になると〈顕在化〉用法の導入が増えることが見られた。

次に、どのレベルにおいても **Creating** フレームの出現率が最も高く、各レベルの出現回数の半分以上を占め、初級と中級の出現頻度はほぼ同様に、55%前後であった。上級になると出現頻度がさらに増え、約75%に達した。よって、「だす」の〈顕在化〉用法が特に上級において、最も頻繁に用いられることが分かった。

さらに、レベルが上がるにつれて **Process_start** フレームを喚起する頻度が低くなる傾向が見られた。

6. 後項動詞「だす」のフレーム結合状況

本節では、「だす」が喚起するフレームによって、前項動詞が喚起されたフレーム（以下：「前項フレーム」）の特徴を考察し、対応分析を用い、図示で各レベルにおける「だす」の用法と前項フレームの関係を明らかにする。

表3 前項動詞が喚起するフレームの異なり語数（単位：フレーム）

フレーム	初級	中級	上級
Locative_relation	2	13	14
Creating	1	7	14
Process_start	2	7	4
合計	5	26	32

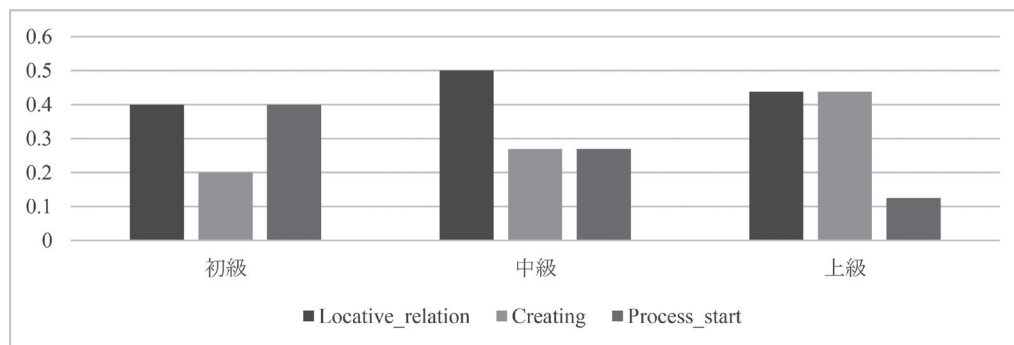


図2 「だす」が喚起されたフレームによって前項フレームの異なり語数率

表3は「だす」の用法によって前項動詞が喚起するフレームのレベル別の異なり語数である。全体的にみると、レベルが上がるにつれて前項動詞が喚起するフレームの種類が増加している。「だす」が **Locative_relation** フレームを喚起する場合、前項動詞が喚起するフレームの種類が最も多い。一方、「だす」が **Process_start** フレームを喚起する場合、前項動詞が喚起するフレームの種類が最も少ないことが分かった。

図2は、各「だす」の用法が前項動詞を喚起するフレームの異なり語数率をレベル別に示している。

図2より、レベルが上がるにつれて **Creating** フレームと共起する前項フレームの種

類が多くなることが分かる。初級では20%であり、上級では40%強に増加した。この結果は、教材の難易度が高くなるとCreatingフレームと共起する前項動詞が多くなり、結合パターンが多くなることを示唆している。また、図1において、初級と中級ではCreatingフレームを喚起するフレームの出現率に差がなく、上級での出現率が最も高かったという結論からみれば、初級ではCreatingフレームを喚起する「だす」が特定の前項フレームと頻繁に共起し、中級と上級においてはCreatingフレームを喚起する「だす」と前項フレームの共起の種類が多くなることが明らかになった。この結果から、初級では〈顕在化〉用法を持つ「だす」の頻度が重視され、中級と上級には頻度重視から種類重視に変わり、網羅的な種類の導入が重視されることが推測できる。

そして、Locative_relationフレームの異なり語数は、初級と上級では約40%を占め、中級では50%に達した。この結果から、各レベルにおいても「だす」は移動を表す際に共起する前項フレームの種類が多いことが窺えた。

さらに、Process_startを喚起する「だす」と共起する前項フレームの比率は、初級、中級、上級では各々40%、20%、10%という傾向が見られ、レベルの上昇につれて少なくなる傾向が見られる。この結果から、〈開始〉用法をもつ「だす」と共起する前項フレームは、学習段階が進むにつれ、出現種類が少なくなることが窺えた。

7. 対応分析を用いて「だす」のフレーム結合状況の分析

対応分析とは、低次元空間に位置するポイントとして変数のカテゴリーを表示することにより、複数のカテゴリカルの変数の連関⁵⁾を分析する(クラウセン 2015)統計手法のことである。

対応分析は様々な言語研究に応用されている。内田(2017)は対応分析を用い、フレーム意味論の観点からbecome、fall、get、grow、turnなどの連結動詞と共起する形容詞の意味内容についての関係を考察した。その結果、getはDesirabilityフレームなどと近接し、共起する形容詞は感情や願望を表す意味内容が多いこと、becomeはCertaintyフレームとの近接から蓋然性や判断に関わる形容詞との共起が多いこと、さらに、growはSizeフレーム、Rate descriptionフレームなどスケールを伴う形容詞と特徴的に共起するとした。

このように、対応分析を用いることで、カテゴリー間の関連を可視化にし、質的な研究を進めていくことが可能となると考えられる。

7.1 Locative_relationフレームのレベル別出現傾向

「だす」がLocative_relationフレームを喚起する場合に、前項動詞が喚起するフレームとレベルの関係について対応分析した結果を図3で示す。横軸(65.8%)と縦軸(34.2%)による累積寄与率は100%である。

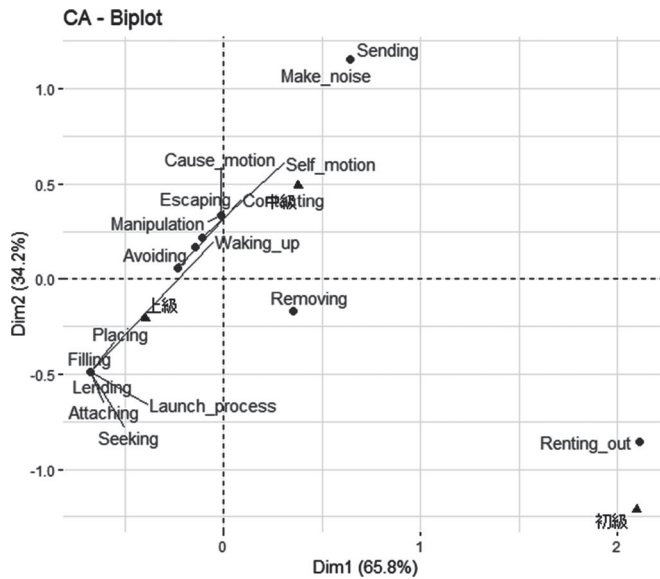


図3 Locative_relationフレームと前項動詞の共起状況

まず、全体的な分布から見ると、3つのレベルは異なる象限に配置されていることから、前項動詞が喚起するフレームの差異が大きく、共通の特徴が少ないことが分かる。初級においてはRenting_Outフレームが喚起され、「貸し出す」を喚起する。中級では喚起された前項フレームは主に移動の手段及び様子を表している。また、上級においては移動の手段及び様子を表すフレームに加え、領域・事業への進出、製造、ある状態から脱出するなどの抽象的な意味を表すフレームが多く喚起された。

そして、Removingフレームは初級が位置する第1象限にあるが、中級と上級との距離が近いことから、どのレベルにおいてもRemovingフレームが喚起される。Removingフレームが喚起された動詞は「取る、連れる、引く」である。「取る」は6回出現し、最も多かった。従って、「取り出す」はどのレベルにおいても学習項目として確立しておく必要がある。

例4 食べ物を取り出しやすいし、そうじもしやすいし、買ってよかった。

(10 初級)

例5 小学生が3、4人乗ってきて、急いで席を取ると、ゲームを取り出し、大声でさわぎ始めました。

(31 中級)

例6 娘が幼いときに使っていた古い本を取り出してきて教えた。

(35 上級)

次に、Contactingフレーム、Avoidingフレーム、Self_motionフレームのタグは中級と上級の中心部分に分布されるため、中級と上級ともに喚起するフレームであることが分かった。

さらに、「引き出す」の前項動詞「引く」は複合動詞の中に表す意味によって

Removing フレームと Cause_motion フレームを喚起し、多義性を持つ複合動詞であることが分かった。中級では、Removing フレームと Cause_motion フレームの両方が喚起され、上級では Cause_motion フレームしか喚起されないことが分かった。

例7 安全に管理されているはずの情報がもれ、預金が引き出されたり、クレジットカードが使われたりすることがあるという。 (㉓ 中級)

例8 子ども個々の意志（課題達成）と欲求（情緒維持）を引き出すようにかかわる。 (㉔ 上級)

7.2 Creating フレームのレベル別出現傾向

図4は、「だす」が Creating フレームを喚起する場合に、前項動詞が喚起するフレームとレベルの関係について対応分析した結果である。

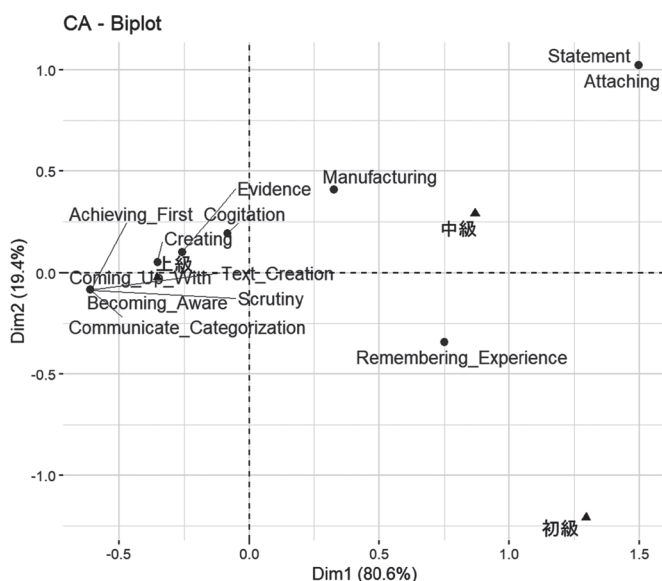


図4 Creating フレームと前項動詞の共起状況

図4から、初級、中級、上級は異なる象限に位置し、共起する前項フレームの出現傾向が異なることが分かった。初級では喚起する前項フレームが少なく、中級ではものの組み合わせにより作成するという意味を表すフレームが多く喚起され、上級では無から有への製造及び調査を表すフレームが多く喚起される傾向が読み取れる。

また、Remembering_experience フレームが初級、中級、上級の間領域に位置し、どのレベルにおいても喚起される傾向が見られた。「思う」が Remembering_experience フレームを喚起し、「思い出す」はどのレベルにおいても頻出することが分かった。

例9 この写真を見ると、家族を思い出します。 (㉕ 初級)

例10 父のことを思い出すと、決まって連想するにおいがある。 (㉖ 中級)

例11 到達した最初の結論をよく思い出し、留意していただきたい。(36 上級)
次に、Cogitation フレームは中級と上級の間に位置し、「考え出す」と「編み出す」の前項動詞によって喚起された。複合動詞リストを確認した結果、「考え出す」は中級と上級に出現し、「編み出す」は上級にしか出現しなかった。

例12 まず身近な食糧問題を解決するため、友達と考え出した仕組みがTFTです。(29 中級)

例13 まずこのテキストが編み出されていった過程をひととおりたどってみることにします。(36 上級)

さらに、「作り出す」と「創り出す」はそれぞれManufacturing フレームとCreating フレームを喚起する。出現頻度から見れば、中級では「作り出す」が多用され、上級では「創り出す」の出現頻度が多くなっている。「作り出す」は無形・有形のものを生産する際に用いられ、「創り出す」は創造すること、新たにものを生み出すことを意味する。

例14 そして、山の土と岩石の状態がうまい水を作り出すのにちょうどよい舞台となっているからだ。(23 中級)

例15 クローン人間を創り出す技術は、今のところなくとも、個人の尊厳の意味を考えるうえでは、好個の話題であるから、一言しておこう。(36 上級)

7.3 Process_start フレームのレベル別出現傾向

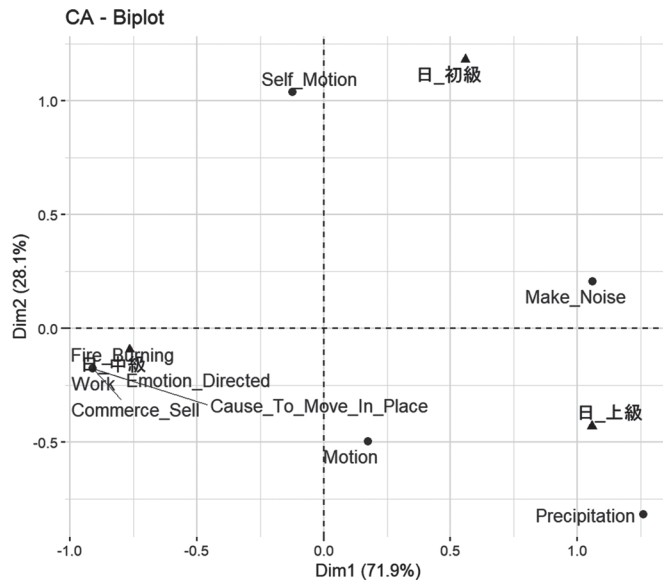


図5 Process_start フレームと前項動詞の共起状況

図5は「出す」がProcess_start フレームを喚起する場合に、前項動詞が喚起するフレームとレベル関係について対応分析を行った結果である。

まず、Process_start フレームにおいて、前項動詞が喚起するフレームは上記の「だす」の2つの用法と同様に、初級、中級、上級はそれぞれ異なる象限に分布し、用法上の共通点が少ないことが分かる。また、Process_start フレームと共起する前項フレームの種類は中級において最も多く、「震え出す、働き出す、怒り出す、売り出す、動き出す」が現れた。また、これらの前項フレームの間に意味の相関が見られず、フレーム間のつながりが捉えにくいことが分かった。

そして、「だす」のLocative_relation フレームとCreating フレームはともに初級と共起するフレームが少なく、上級と共起するフレームが最も多かったが、「だす」のProcess_start フレームは中級と共起するフレームの種類が最も多く見られた。

8. まとめと今後の課題

本研究は後項動詞「だす」の用法について、フレーム意味論の観点からレベル別の出現傾向を明らかにすることを試みた。その結果、フレーム意味論を用いることで、複合動詞のレベル別出現傾向を体系化することが可能となることが窺われた。この結果を踏まえれば、教師は学習者の習熟度によって習得すべき複合動詞を選択し、適切な学習計画を立てられると考える。学習者もレベルや目的に応じて学習すべき複合動詞を選択することができるようになるだろう。今後の課題は、海外の日本語教科書における複合動詞の出現傾向を考察することである。世界各国の日本語教科書が複合動詞をどのように扱っているかをフレーム意味論の枠組みで分析し、日本語学習者の効果的な学習に寄与したい。

注

1) 具体的な書誌情報は以下の通りである。丸数字は用例中に示した教科書の番号である。

初級

- ① 『みんなの日本語第2版 初級1』(2012)、
- ② 『みんなの日本語第2版 初級2』(2013)、
- ③ 『日本語大地 初級2』(2009)、④ 『日本語大地 初級1』(2008)、
- ⑤ 『大学の日本語 ともだち Vol.1』(2017)、
- ⑥ 『大学の日本語 ともだち Vol.2』(2017)、
- ⑦ 『まるごと 初級1 A2 かつどう』(2014)、
- ⑧ 『まるごと 初級1 A2 りかい』(2014)、
- ⑨ 『まるごと 初級2 A2 かつどう』(2014)、
- ⑩ 『まるごと 初級2 A2 りかい』(2014)、
- ⑪ 『学ぼう！にほんご 初級1』(2005)、⑫ 『学ぼう！にほんご 初級2』(2009)、
- ⑬ 『日本語新装 改訂版 上』(2010)、⑭ 『日本語新装 改訂版 下』(2010)、

- ⑮『日本語5つのとびら 初級1』(2009)、⑯『日本語5つのとびら 初級2』(2010)、
 ⑰『つなぐにほんご 初級1』(2017)、⑱『つなぐにほんご 初級2』(2017)、
 ⑲『できる日本語 本冊 初級』(2011)、
 ⑳『げんき1 第3版』(2020)、㉑『げんき2 第3版』(2020)

中級

- ㉒『みんなの日本語 中級1』(2008) ㉓『みんなの日本語 中級2』(2012)、
 ㉔『中級日本語 新装改訂版 上』(2015)、
 ㉕『中級日本語 新装改訂版 下』(2015)、㉖『日本語5つのとびら』(2008)、
 ㉗『まるごと 日本のことばと文化 中級1』(2016)、
 ㉘『まるごと 日本のことばと文化 中級2』(2017)、
 ㉙『できる日本語 本冊 中級』(2012)、㉚『学ぼう！にほんご 中級』(2007)、
 ㉛『テーマ別中級から学ぶ日本語』(2014)、㉜『わたしの見つけた日本』(2013)

上級

- ㉝『学ぼう！にほんご 上級』(2010)、㉞『テーマ別上級で学ぶ日本語』(2016)、
 ㉟『文化へのまなざし』(2005)、㊱『上級日本語』(2010)、
 ㊲『会話式日本語文法 上級編』(2002)、㊳『会話式日本語文法 応用編』(2002)、
 ㊴『トピックによる日本語総合演習』(2010)、
 ㊵『日本をたどりなおす29の方法』(2016)

* 出版社：①～④、㉒、㉓、㉙：スリーエーネットワーク／ ⑤、⑥、㉚：東京外国語大学出版会／ ⑦～⑩、㉗、㉘：三修社／ ⑪、⑫、㉛、㉜：専門教育出版／ ⑬～⑯、㉔～㉖、㉞：凡人社／ ⑰、⑱：アスク／ ⑲、㉙：アルク／ ⑳、㉑：ジャパントゥタイムズ／ ㉒、㉓：研究社／ ㉔、㉕：東京大学出版社／ ㉖、㉗：博進堂

- 2) フレームネットは現在英語版が公開されているが、日本語版は研究が進行中であり、非公開である。そのため、日本語を英語に翻訳して分析を進める。なお、英語のフレームネットを用いた日本語の分析に藤井・内田(2023)がある。藤井・内田(2023)はフレームネットを用い、argueが「Reasoning フレーム」「Quarreling フレーム」「Evidence フレーム」を喚起する際に、対応する日本語の語彙を考察した。その結果、「議論する」など一部の語は「Reasoning フレーム」の意義でも「Quarreling フレーム」の意義でも使用可能である一方、「Evidence フレーム」の意義は、「示す」「証明する」等他の語を用いて表されると述べている。また、藤井・内田(2023)は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を対象に、フレームネットを用いて外語・芸術・社会等各ジャンルの意味的な特徴を明らかにした。その結果、BCCWJの教科書コーパスにおいて、理系ジャンルに関する「変化」を表すフレーム(「Transitive_action フレーム」「Change_position_on_a_scale フレーム」)が特徴的であることが分かった。
- 3) Creating フレームの定義は、以下のURLを参照のこと。

<https://framenet2.icsi.berkeley.edu/fnReports/data/frameIndex.xml?frame=Creating>

4) Process_start フレームの定義は、以下のURLを参照のこと。

https://framenet2.icsi.berkeley.edu/fnReports/data/frameIndex.xml?frame=Process_start

5) 連関は association に訳す。

参考文献

- 内田諭 (2017) 「対応分析と FrameNet を用いた共起語の意味分析：状態変化を表す連結動詞を例に」『統計数理研究所共同研究レポート』 381、39-50
- 王蓓淳 (2009) 「中国語複合動詞『V 出』の意味構造」『大阪大学言語文化学』 18、209-220
- 小原京子・長谷川葉子 (2022) 「解釈述語と内容述語の主要部交替—Run_risk フレームにかかわる英語と日本語の文構造の考察—」松本曜・小原京子 (編) 『フレーム意味論の貢献：動詞とその周辺』 開拓社、20-41
- 金蘭 (2014) 「複合動詞の日中対照研究—学習者の習得状況および両言語の対応する表現に基づいて—」神戸大学大学院国際文化学研究科グローバル文化専攻博士論文
- クラウセン、ステン・エリック (2015) 『対応分析入門原理から応用まで—解説Rで検算しながら理解する』 藤本一男 (訳) オーム社 (Sten-Erik, Clausen. (1998). Applied Correspondence Analysis: An Introduction. Saga Publications, Inc.)
- 国立国語研究所 (1985) 『語の研究と教育 (下)』 大蔵省印刷局
- 田辺和子 (1983) 「複合動詞の意味と構成—『～ダス』・『～アゲル』を中心に—」『日本語と日本文学』 3、40-49
- 張威 (2009) 「中学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析—第二言語習得学習ストラテジーの改善をめざして—」『異文化としての日本』、123-132
- 陳奕廷・松本曜 (2018) 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系』 ひつじ書房
- 姫野昌子 (1977) 「複合動詞『～でる』と『～だす』」『日本語学校論集』 4、71-95
- 藤井聖子・内田諭 (2023) 『フレーム意味論とフレームネット』 研究社
- 白以然 (2007) 「韓国語母語話者の複合動詞『～出す』の習得—日本語母語話者と意味領域の比較を中心に—」『世界の日本語教育』 17、79-91
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』 14、69-86
- ローレンス・ニューベリー・ペイトン (2020) 「日本語の複合動詞『～出す』と英語の句動詞“V+out”の対照研究」『東京外国語大学日本研究教育年報』 24、20-36
- The International Computer Science Institute in Berkeley. (1977). FrameNet <https://framenet.icsi.berkeley.edu/> (October 22, 2023)